二〇二三年度　田園調布学園大学
全学部全学科専攻　共通

国語　入学試験問題

一般選抜（個別試験型）B日程

受験番号

（注意）
一、解答は、すべて別紙の「解答用紙」に記入してください。
二、受験番号と氏名は、「問題用紙」と「解答用紙」の両方の所定の欄にかならず記入してください。
三、「問題用紙」と「解答用紙」は、試験終了後、かならず提出してください。
四、「問題用紙」に「下書き」「書き込み」などをしてもかまいません。
五、試験時間は六〇分です。

氏名

（一）次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

近年、あちこちで「孤独」が問題視されています。とりわけここ三年ほど、新型コロナウイルスの感染拡大により、人と人とのつながりがいっそう希薄化したことで、もともと社会がａナイホウしていた孤独の問題が顕在化してきた感があります。

ただ①巷間（こうかん）ささやかれているほど、「孤独」という状態は悪いものなのか。

また「孤独に苦しめられている」と訴える人は、本当に孤独なのか。

「孤独」という言葉が何となく安易に、しかもマイナスの側面を強調して使われ過ぎているような気がします。たとえば――、

「家族がいるし、会社勤めもしているが、何だか自分の居場所がない。孤独だ」

「ＳＮＳでつながっている友だちはたくさんいるのに、深くつき合っている人はほとんどいない。孤独だ」

「今日は家で一日中、誰にも会わず、何もせず、ただボーッと過ごしてしまった。孤独だ」

「食事や遊びに誘っても、断られてばかり。孤独だ」

といった場合はどうでしょう？　本当に孤独ですか？

その程度のことと言ってはなんですが、それは「孤独」ではなくて、「孤独感」なのではないか、と私は思うのです。

「孤独」と「孤独感」は同じもののようですが、違います。「感」の一字がつくだけで、意味がガラリと変わるのです。

「孤独」とはひとりきりの　Ａ　。

「孤独感」とはひとりきりの　Ｂ　。

そう定義すると、いま問題視されている「孤独」の多くが、「孤独」の状態そのものに悩んでいるのではなく、忍び寄る「孤独感」に心がｂ苛まれている、と見ていい。

ここをまずはっきりさせると、「何とか孤独から脱しなければダメだ」などと、②強迫観念のように思い詰めていた心が、ふっと軽くなります。

「孤独だ、孤独だと思っていたけれど、気分の問題なんだから、そう深刻になることもないな」というふうに。

心に孤独感が広がることは、頻度・程度の差こそあれ、誰にでもあります。

逆に「自分の周りにはいつも人の花が咲いているし、孤独感とは無縁だね」なんて人のほうが珍しいでしょう。

そのくらい孤独感は誰にとっても、身近な気分なのです。なぜなら、孤独感というものはふとした瞬間、するりと心に忍び入るものだからです。

たとえば仲良し四人組がいて、いつも何をするにもいっしょに行動していたのに、自分を除く三人が、ディズニーランドに遊びに行ったとします。知らなければそれまでですが、ひょんなことからその話が耳に入ると、ちょっと傷つきますよね？

その傷口から孤独感が忍び入り、心にじわじわと広がってしまいます。「仲間はずれにされちゃった。どうしてだろう？　何か嫌われることをしたかな」などと考え、直接尋ねる勇気も出ないままに、孤独感を深めていく。そういうことはよくあります。

また友だち同士、グループラインでメッセージをやりとりしていて、ふと「自分のメッセージは大半が既読スルーされてる」などと気づく。そんなときも孤独感が心にするりと忍び入ってきます。

ほかにも「会議で発言したのに無視された」とか、「自分だけ連絡事項を伝えてもらえなかった」「飲み会のお誘いがない」「上司が声をかけてくれない」など、③ふとした瞬間に孤独感を覚える場面は、誰にでも、いくらでもあります。

「孤独感ってヤツは人を選ばず、cスキあらば心に忍び入ってくるものなのだ」

と軽く考えるくらいで、ちょうどいいかと思います。

さらに言うと、④孤独感にオリジナリティはありません。

孤独感に襲われると、それを「誰も経験したことのない、自分だけに生じた特別な痛み」のように感じるかもしれません。孤独に悩む人がよく「自分の気持ちなんか、誰もわかってくれない」などと言うのも、どこかで自分の孤独感は特別だと思っているからでしょう。

たしかに人生で起こることも、それをどう感じるかも、人ぞれぞれ。　C　にはできないものです。

しかし現実には、孤独感というものは各人各様でありながら、実は「ステレオタイプ」なものなのです。

たとえば失恋したときの孤独感。いかにステレオタイプなものであるかは、音楽を聞くとよくわかります。

Jポップや演歌はもとより、海外のポップス、ロック、ジャズ、クラシックまで、あらゆる種類の音楽を全世界横断的に見てみると、失恋をテーマにした曲がどれほど多いことか。いわゆる流行歌に至っては、私の感覚では少なく見積もっても半分以上が失恋ソングではないかと思います。

そういった失恋ソングを片っ端から聞きまくってみる。自分の抱えていた〝失恋由来の孤独感〟が、これでもかというくらい見つかります。

つまり自分にとっての大失恋も、そのショックがもたらす孤独感も、世間一般、〝あるある〟なもの。　D　の特別なものとして苦しむことはないと言えます。

それは失恋に限ったことではありません。音楽をはじめ小説、芝居、ドラマ、映画、マンガなどの創作世界では、多種多様な孤独感を描き出しています。フィクションのみならずノンフィクションでも、孤独感はさまざまに描かれます。

ひとりぼっちのときにじわじわと心に忍び寄る孤独感は、どんなケースもほぼほぼ同じ。ステレオタイプなものなのです。

なにも私は、みなさんの失恋とか孤独感を「⑤ありきたりだ」とバカにしたいのではありません。繰り返しますが、孤独感は大半が気分的なものですから、自分だけに襲いかかる特別なものと、おおげさに受け止めないほうがいい、ということです。

孤独感に対する感受性が強いために、いたずらに、〝無用の孤独感〟に苦しめられる場合があります。先ほどのディズニーランドなどの例で言うと、相手の側にこんな事情があったかもしれません。順に可能性をあげてみましょう。

「仲良し四人組の三人がたまたま顔を合わせたときに、これからディズニーランドに行こうか

と盛り上がっただけで、ひとりを仲間はずれにしたわけではない」

「みんな、ちょっと忙しくて、たまたまグループラインにメッセージを書く暇がなかっただけで、意図的に既読スルーしたわけではない。特定のひとりに既読スルーが頻発しているとしても、たまたま重なっただけのことだ」

「会議での発言はすべて議事録に残している。終了時間が迫っていたので、その場では発言を聞くに留めただけ。誰も無視などしていないし、次の会議で議論する予定だ」

「連絡事項が伝わらなかったのは、単なるミス。たまたま連絡先から洩れていただけ」

「飲み会に誘わなかったのは、忙しそうだったから。他意はない」

「問題なく仕事を進めているから、上司として声をかける必要を感じなかっただけ」

もしこういった〝真相〟があったとしたら、ムダに孤独感に絡め取られていたことになりますよね？　　E　　苦労だったわけです。

とはいえ、孤独感をキャッチするたびにいちいち事情を探ったり、相手の真意をたしかめたりするのは面倒なことです。

⑥この程度の孤独感なら、悩むだけ時間のムダ。〝心の習慣〟として、「d適宜、スルーする」ワザを覚えることをおすすめします。そのためのキーワードはこれ。

⑦幽霊の正体見たり枯れ尾花

文字通り、「幽霊だと思って恐れていたものが、よくよく見たら、枯れたススキの穂だった」という意味です。

「怖いな」「イヤだな」と感じる気分というのは、正体がわからないところから発するもの。正体がわかれば、「なあんだ」となることが多いのです。

孤独感もそう。ひとたび心に入ってくると、「孤独だ。寂しい。不安だ」というマイナス感情を、心のなかでどんどん膨らませ、モンスター化させてしまう部分があります。

たいがいは根拠のない思いこみに過ぎないので、ちょっと孤独感が忍び寄ってくる気配を察したら、この言葉をeジュモンのように唱えてみるといいでしょう。

「孤独感の正体見たり枯れ尾花」

というふうに言い換えて。

ちなみにこの言葉は、横井也有という俳句を嗜（たしな）んだ江戸時代の尾張藩士の俳文集『鶉衣（うずらごろも）』にある「化物の正体見たり枯をばな」が変化した句と言われています。

也有は、当時関西でもてはやされていた俳句の宗匠（注）と対面したときの印象を、この俳句に詠んだそうです。大物と評判の俳人も会ってみたら気さくな人物だった、というところでしょうか。

（齋藤孝『孤独を生きる』より）

注　和歌、俳句、芸能などの師匠。

問一　二重傍線部a～eについて、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二　傍線部①「巷間」、②「強迫観念」、⑤「ありきたり」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

①巷間

ア　一般的に
イ　こっそりと
ウ　親しい同士で
エ　世間で
オ　流行して

②強迫観念

ア　自分の意に反した求めに拒否できないもどかしい思い。
イ　他人から害を与えるとおどしつけられた恐ろしい記憶。
ウ　ちょっとのことでは後に引けないという強く固い意思。
エ　払いのけようと努力しても強く浮かんでくるいやな考え。
オ　よくないことは排除しなければならないという正義感。

⑤ありきたり

ア　どこにでもあるありふれたこと。
イ　似た例がたくさんあること。
ウ　他にもあってよさそうなこと。
エ　見るべきところがないこと。
オ　弱弱しく情けないこと。

問三　空欄AとBに、それぞれ適する漢字二字のことばを、本文中から抜き出し、書きなさい。

問四　傍線部③「ふとした瞬間に孤独感を覚える場面」として不適当なものを、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　放課後、仲良し組でテスト勉強を毎日していたのに、自分だけが成績が上がらなかった。
イ　友人はみな彼氏がいて休日にデートを楽しんでいるが、自分にはその相手がいない。
ウ　たったひとりで旅行に行ったり、美味しい物を食べに出掛けたりする。
エ　最近、喫煙者が外でタバコを吸える場所がなくなってきた。
オ　コロナ感染で通学できなかった時期に、読みたかった長編小説を全巻読んだ。

問五　傍線部④「孤独感にオリジナリティはありません」とあるが、どういうことか。六〇字以内で説明しなさい（句読点や記号を含む）。

（下書き用）

問六　空欄C・Dに入る最も適当な表現を、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　青菜に塩　　イ　一網打尽　　ウ　十把一絡げ　　エ　十人十色

オ　雀の涙　　カ　二束三文　　キ　本末転倒　　ク　唯一無二

問七　傍線部⑥「この程度の孤独感なら、悩むだけ時間のムダ」とあるが、なぜか。その理由を示す部分を、解答欄に合うように二〇字以内で抜き出しなさい。

問八　空欄Eに適する「〇〇〇〇苦労」となる一つづきのことばを、漢字かな混じりの四文字で書きなさい。

問九　傍線部⑦「幽霊の正体見たり枯れ尾花」という表現を使う場面として適切なものを、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　毎晩どこからともなく苦しそうな声が聞こえて眠れなかった。思い切って、声の聞こえる部屋の扉を開けてみたら、父のいびきだった。ここのところ仕事で疲れているらしい。

イ　好きな歌手のライブのチケットが当たるかどうか心配していたが、なんと自分のチケットだけでなく両親や妹の分までも当選し、家族全員でライブに行けることになった。

ウ　最近誰からも連絡がないので自分が何か悪いことをしたのかずっと悩んでいたら、スマホの設定が着信拒否になっていた。

エ　近所で夜中に小さなボヤが続いたので、住民が交替で夜通し見張っていたところ、ライターでゴミに火をつけようとした男を捕まえることができた。

オ　最近胃がキリキリと痛むことが多く気になっていたが、病院でストレスによる胃腸炎と診断された。

問十　本文の内容についての説明として、適当なものには○を、適当でないものには×を記しなさい。

ア　孤独と孤独感は全く異なるもので、孤独感は誰にでもあるが、孤独はめったにない深刻なものである。

イ　孤独感は誰にでもあるものだから、どうしても逃れなければならないなどと大げさに考えない方がよい。

ウ　ふと忍び寄る孤独感は、自分の思い違いが原因であることが多いので、真相を究明するとすっきりすることが多い。

エ　孤独感はどんどん大きくなってしまうこともあるので、気にしすぎないで大したことではないと自分に言い聞かせることも大事だ。

オ　じわじわと心の中に忍び寄る孤独感は一時的なものであるから、適当にスルーして乗り切ることが大事だ。

（二）次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

憧憬と郷愁、別離と帰郷――それが旅の姿である。しかし、もし、この二つの異った方向が一つの輪に結ばれていたら、①そのような宿命を持つ旅人は、いつまでも輪を描いて歩き続けることになる。

初めてヨーロッパへ旅立ったのは、東京美術学校を卒業して間もなくの一九三三年（昭和八年）であった。ドイツを主な滞在地として、二年間、ヨーロッパの美術の研究と、生活を体験した。既に遠い昔である。

ヨーロッパと日本は、それ以来、私の心の中に憧憬と郷愁の輪になって結ばれた。戦後、私が度々、両者の間を往き来することになったのも、その根は深いところに在る。

今は誰の記憶にも無い作品だが、戦前に私は「古き町にて」と題して日本とドイツの古都を、それぞれ三点ずつの連作として描いた。戦争を経て長い歳月が過ぎても、私には折に触れて、ドイツの古都の情景が浮び上ってくることがあった。

古びた都門を潜り、石畳みの道を私は歩いて行く。両側には傾斜の急な破風（注1）の家々が、どの窓にも溢れるように花を飾って建ち並んでいる。その窓の花は、私に“Willkommen!”（注2）と囁きかける。ところどころにガス燈の形をそのままに残した街燈、鉄細工の唐草模様をつけた趣のある看板。道は私を町の真中の広場へと導いてゆく。

広場のまわりには、古風な市庁舎、ホテル、教会の高い塔、中央には石の彫刻のついた泉、酒場の庭の菩提樹の木蔭に並べられたテーブル……。

先年、京都を主題にした連作と、新宮殿の壁画「朝明けの潮」を、殆んど同時期に描き終えた時、こんどは遠くの方からドイツの古都が私を呼んでいるのを感じた。老い疲れようとする身心に、少しでも若い日の鼓動を甦らせたい願いもあって、私は三十六年振りに再遊の旅に出た。

私には懐しい期待と、同時に不安もあった。戦争を経て、古い町々の面影が今も残っているだろうか。もし失われていたならば、私の心の青春の残影も消え去ってしまうことになるだろう。幸いなことにドイツの北から南へ、そしてオーストリアへの旅を通じて、中にはベルリンのように大きく変った都市もあったが、小さな町は②昔日の姿をよく残していた。私の夢の情景そのままでさえあったと言える。私の胸はそんな町に巡り合うたびに若々しく高鳴った。

また、到るところでa清澄な自然にも心を慰められることが多かった。自然と古都、そのどちらをも、美しく保とうとする「人間」の心が籠っていた。

バイエルンのドイツ第一級の観光地であるケーニヒ湖の湖岸には、昔あった二軒の木造のホテルがあるだけで、湖を巡る歩道さえつけられていない。遊覧船も電動船で、波を立てずに、ゆっくりと滑るように航行する。両岸は針葉樹の繁る切り立った断崖である。湖のなかばで船のエンジンを止め、船員がトランペットを、一節ずつ区切って吹く。すると四方の岩壁から、こだまがいくつも返ってくる。湖の静寂は、この時いっそう深まり、山湖の霊に触れる思いがする。

この湖の奥に、さらに一つの湖があって、やはり雄大な景観であるが、ここにはボートも浮んでいない。湖畔のごく狭い草地に、ただ一軒の丸太造りの牛小屋があって、中を覗くと炉にはチーズを造るための大きな鍋がかかっている。壁に掛けた飾り皿に、

安息は人間にとって神聖なもの
ただ狂人だけが急ぐ

と書かれていた。次の部屋の戸口からはb柔和な牛の瞳が私を見つめていた。

いわゆるロマンティシェ街道の古都ローテンブルクを訪れた私は、若い時にスケッチした広場の泉を、以前と同じ構図で描いた。背後にある古い市庁舎は爆撃で破壊されたのを、以前の通りに再建して壁の古色までつけられている。③私は過ぎ去った長い年月を忘れる想いであった。そのローテンブルクの都門の一つには、

歩み入る者に　やすらぎを
去り行く人に　しあわせを

とラテン語で刻まれている。

私はこの旅で現在の私達の文明の方向と、その激しい速度について、また、私自身の日々の生活と心の在り方について、④反省しないではいられない多くのものを感じた。

若い時の私は、感覚的な要素の多い青年であった。ドイツに留学したのは、一つには知性による支えが欲しかったからである。三十六年を経て再び訪れた時は、この厳しい精神風土の国を旅しながら、私が感じたのは、むしろ、心のやすらいであった。

一九七八年十一月記

（『ドイツ・オーストリア　東山魁夷小画集』より）

【文章Ⅱ】

《ここ以外ならどこへでも》とボードレール（注3）は詩に書きつけたが、地上のすべてにたいする嫌悪を書きつづけた詩人としては、嫌悪の酸を浴びながらもcフクツに顔をもたげてくる生への渇望をこの一語に濃縮したと見ていいだろう。それはいうまでもなく旅への望みを語っているわけだが、⑤少年時代後半の私は焼跡を歩きながらこの句を呟きつづけていた。日本脱出というのがたった一つといっていいくらいの私のd妄執であった。それにしがみついて飢えや、孤独や、潮のように迫ってくる恐怖を⑥うっちゃろうと必死になっていた。その頃、私は町のパン工場でパンを焼きながら、夢中になって横文字の本を読んで英語の単語をおぼえにかかっていたが、神戸港へいってどこかの船にもぐりこんで、というのが夢であった。アメリカ、ブラジル、アルゼンチン、行先はどこでもよかった。とにかくも日本から逃げられさえすればいいのだった。しかし、英語の辞書は部厚くて、語数はとめどなくあり、栄養失調でたちぐらみがしてチカチカと暗いなかを眼華が光りつつ舞う体では、とても密航などできそうにないし、ろくに英語も喋れないのだから、そのことを考えると　　A　　であった。ずっとあとになって小説を書くようになり、海外へ自由にいけるようになって、はじめてパリへいったときは信じられなかった。歓喜が　　B　　にこみあげてきて、ホテルでおとなしく寝ていられたものではなかった。足の向くままに徹夜で歩きまわり、くたくたに疲れて夜明け頃、パンの香りや霧といっしょにホテルにもどった。　　C　　な夜のパリを靴音たててさまよい歩き、暗がりから浮かびあがる紺地の町名板を読んで、これはどの本にでてきた町だ、あれは誰かが住んでた町だと記憶をまさぐるのは愉しみだった。そして、一にも信じられず、二にも信じられず、三にも信じられなかった。

プラハ（注4）の薄暗い下宿にたれこめたきりで『アメリカ』を書いたカフカ（注5）の例がある。⑦しかし私は想像力が貧しいから経験という果実から酒をつくるしかないのである。経験からeブンピツされるものを書く。荒涼とした心の冷暗の箇処に瓶を寝かせて待つのである。忘れたそぶりをして待つのである。これはそぶりであって、忘れるのではない。しばしば作品は直視すると　D　に逃げていくから、ちょっとそっぽ向くふりをして、向うからよってくるのをじっと待つのである。そしてそれをつかまえて克服できたとき、私は空虚になるから、どこかへ出かけていって、⑧靴を投げてみるのである。

（『開高健エッセイ選集　ああ。二十五年』より）

注

1　屋根の両端の三角部分のこと。
2　英語のwelcomeにあたるドイツ語。いらっしゃいの意。
3　フランスの詩人、評論家（1821－1867）。
4　チェコの首都。
5　チェコ出身の作家（1883－1924）。

問一　二重傍線部a～eについて、漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に改め、楷書で正確に書きなさい。

問二　傍線部②「昔日の姿」、⑥「うっちゃろう」について、本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

②昔日の姿
ア　今とは異なる景観
イ　変化を受けた痕跡
ウ　歴史的な面影
エ　記憶の中の情景
オ　過去の風景

⑥うっちゃろう
ア　打ち負かそう
イ　投げ倒そう
ウ　無視しよう
エ　投げ捨てよう
オ　蹴落とそう

問三　傍線部①「そのような宿命を持つ旅人」とあるが、この説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　一つは「憧憬と郷愁」、もう一つは「別離と帰郷」という意味のまったく異なる二つを一つの同質のものとして結び付けて旅に向かう人のこと。

イ　その地に憧れをもつ一方、その地を故郷のように思うという、土地への異なる思いを自分の心の中に一つのものとして根付かせ旅に出る人のこと。

ウ　日本に生まれたが、留学先のドイツを愛し、両国ともに憧れの地とも故郷ともなったため、二国間を往復せざるをえなくなった人のこと。

エ　憧憬と郷愁、別離と帰郷という、まったく逆の二つの方向性をもつ感覚を、生まれながらに一つに結ぶことのできる感性の持ち主のこと。

オ　戦前からヨーロッパと日本の古都を愛し、往き来することで、一方の国を憧憬し他方を郷愁の対象として心の中の深いところに結ぶことができた旅人のこと。

問四　傍線部③「私は過ぎ去った長い年月を忘れる想いであった」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　数十年を経て同じ都市を訪れ、以前描いた絵の構図とまったく同じように描くために集中し、そのスケッチに熱中するあまり、時間感覚がなくなったから。

イ　市庁舎が爆撃で破壊されたにもかかわらず、壁の色にも古色をつけるなど古都ローテンブルクが以前の通りに再建されており、その完成度に感激したから。

ウ　古都ローテンブルクが人工的に再建された市庁舎があるとはいえ、数十年経てなお、かつて描いた絵の構図と同じ絵が描けるくらい以前の通りだったから。

エ　戦争をはさんで年を取って訪れた古都の都門に刻まれたラテン語にあるように、変わらない姿である古都そのものが、やすらぎとしあわせを与えてくれたから。

オ　最初の訪れは多感な青年期だったが、三十六年の間で経験や心境に変化はあっても、以前と変わらない姿を見せる古都を前にして初心を思い出したから。

問五　傍線部④「反省しないではいられない多くのもの」とあるが、何を反省したのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　憧憬と郷愁という異なる方向をもった輪を心のなかに結びつけないこと
イ　古いものや自然をかたくなに保ってきた日本人の心
ウ　石畳みやガス燈の形をした街燈、鉄細工の看板に象徴される近代文明
エ　古いものを刷新したり、効率や速度を優先したりする発想
オ　感覚的な見方を捨て、知性による支えを求めようとする人間の心

問六　傍線部⑤「少年時代後半の私は焼跡を歩きながらこの句を呟きつづけていた」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　少年時代後半は戦後の時期で、飢えや孤独といった生を疎外する恐怖が多くあるなか、日本脱出を心の支えにするほど「私」も生きることを強く望んでいたから。
イ　少年時代後半に特有の、世の中への反感が強く、現状を打破するためにも日本から逃げる旅に出るほかに方法がないほど、「私」がこの世のすべてを嫌悪していたから。
ウ　生きていく欲望は強くあっても、戦火が激しくなるなか、死への恐怖から逃れるためには日本以外のどこかの国へ行くしかなく、「私」が日本脱出を試みていたから。
エ　作家を目指していた「私」は少年期から、世の中の嫌悪を見事な詩句にするボードレールに憧れ、身に染みつくほどにその句を繰り返していたから。
オ　ボードレールが生きることに執着することでこの世の嫌悪から逃れたように、少年時代後半の「私」も旅を熱望することで、戦後の悲劇から逃れたいと思っていたから。

問七　空欄A～Dに入る最も適当な表現を、次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　猫のよう
イ　噴水のよう
ウ　壮大な石の森のよう
エ　夜を告げる鳥たちの群のよう
オ　足のうらの砂を水に奪われるよう

問八　傍線部⑦「しかし私は想像力が貧しいから経験という果実から酒をつくるしかない」とあるが、それはどのようなことか。九〇字以内で説明しなさい（句読点や記号を含む）。

（下書き用）

問九　傍線部⑧「靴を投げてみる」とはどのようなことか。同じ作品中にある次の文章を参考に、その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

> メコン・デルタへいったときは、たしかヴィンロンだったと思うけど、朝、バスの乗場へいってみたら道が二つにわかれていることがわかり、どちらをとっていいのかわからないので、靴をぬいで投げたことがある。その表か裏かで行き先をきめたのである。

ア　空虚になった自分の心を何かで埋めたいと思う心とどこか旅へ出かけたいという心が二つあるので、どちらを優先するか決めるために靴を投げたということ。

イ　小説を書き終え空虚になり、また旅に出た時、その後の行き先を決めることは重要ではなく、靴に行先をゆだねて決まったところへ行こうということ。

ウ　まだ小説に書いていない国も多く、心が空虚になってしまった今、どこかに行きたい欲望はあるが、特に目的地があるわけではないので、靴に託して決めようということ。

エ　次の小説を書くため、新たな目的地を設定しなくてはいけないが、行きたい国が多く決められないので、靴を投げて次の目的地を決めるということ。

オ　作品が向うからよってくるのを待つように、旅に出たときも、その後の目的地については自分で積極的に決めるのではなく、靴を投げて決めるように運命に身をあずけるということ。

問十　次に示すのは、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んだ高校生が意見を述べたものである。本文の趣旨に基づいて意見を述べているものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　【文章Ⅰ】を読むと、日本の古都を描くためにヨーロッパへ行って、古い町並みの風景や自然に癒されたことが、筆者の画業に重要だったことがわかったわ。ヨーロッパへの憧れが、日本回帰へと繋がって輪となっているという旅への思いは、小説を描くためにも必要であることが【文章Ⅱ】からも伝わってきたわ。

イ　【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】ともに、日本以外の土地への強い思いと、少年期、青年期に精神的支柱としての知性をドイツの都市やパリに求めていたことが分かったな。一級の観光地でも歩道は石畳みだし、ホテルの整備も遅れていて、でも、そのおかげで時が経っても自然が保持されているから人間性を回復することができるということね。

ウ　【文章Ⅰ】は、青年期と変わらずにあるドイツの風景から、現在の文明の在り方への反省が語られ、【文章Ⅱ】は、生きるために日本脱出を望んで果たせず、作家となってから初めてパリを訪れ、そこが本当にパリだということに感動していることが伝わってきたな。筆者はふたりとも、少年期や青年期に戦争体験があるんだな。

エ　【文章Ⅰ】が古都の風景だけでなく飾り皿や門に彫られた言葉といった視覚的な方向から迫るのに対して、【文章Ⅱ】は詩人の言葉や比喩を多用して、仮想の出来事もあたかも現実のことのように書いていて、面白かった。絵を表現する画家と、言葉を表現する作家との差が如実に出ているし、表現者にとって旅は必要不可欠なんだ。

オ　旅にやすらぎを求める【文章Ⅰ】と反対に、少年期に飢えや孤独を味わった経験のある【文章Ⅱ】の筆者は、旅に読書体験の跡を探し、どん欲に自作の糧にしようとしていることが印象的ね。ＳＮＳが今ほど発達していなかったから、海外のことを知るのも実際に現地を訪れるしかなく、旅が現実の生きた経験になることが伝わったわ。

(三) 次の文中の空欄にあてはまる最も適当な語句を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

①決算期は（　　）、お忙しいことと存じます。

ア　いつもにもまして　　イ　いつにもまして　　ウ　一方ならぬ　　エ　重ね重ね

②急に、約束をキャンセルされて、間が（　　）。

ア　延びた　　イ　抜けた　　ウ　持てない　　エ　持たない

③彼の無責任な行動に、怒り心頭に（　　）。

ア　発した　　イ　達した　　ウ　狂った　　エ　至った

④彼に何を食べたいか聞いたが、うんとも（　　）言わなかった。

ア　なんとも　　イ　かんとも　　ウ　ふんとも　　エ　すんとも

⑤野党の質問は、的を（　　）ものだった。

ア　得た　　イ　当てた　　ウ　打った　　エ　射た

⑥夏炉冬（　　）とは、時期はずれで役にたたないことのたとえである。

ア　氷　　イ　扇　　ウ　風　　エ　枕

⑦我が国は、（　　）な立場で、両国の問題に関わることにした。

ア　ニュートラル　　イ　ベーシック　　ウ　メランコリック　　エ　ペダンチック

⑧「先生、私は明日、祖父の家へ（　　）。」

ア　伺います　　イ　参ります　　ウ　いらっしゃいます　　エ　お出かけになります

⑨白い鳩は、平和の（　　）である。

ア　エッセンス　　イ　シンメトリー　　ウ　オノマトペ　　エ　シンボル

⑩拝啓　立春の（　　）　皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

ア　日　　イ　候　　ウ　時　　エ　際